

# まちの歴史通信

第34号

2005.3.1

国白河郡下に属していた。

依上保（現在の町域）は、十六世紀に入り、常陸太田を本拠地とする佐竹氏の陸奥南部進攻が本格化するに至つて佐竹氏の影響下には入り、文禄三年（一五九四）太閤検地が行われ、これ以後、依上保は常陸国久慈郡に正式に編入された。

大子町西金地区の北沢地内で、足跡化石調査を進めていた筑波大学足跡調査会（代表野田浩司筑波大名誉教授）のメンバー

によつてゾウ類足跡化石が発見され、去る二月二十七日（日）北沢集会所や現地で説明会が行われた。調査会の説明資料等によると、ゾウ類足跡化石は、今から一六五〇万年前ころに積もつた新生代第三紀中新世浅川層から発見されたものである。この地域が陸から海へ移つていつたその少し前の時代に棲息していたゾウ「ステゴロホドン」であるという。人類の歴史からみれば、人類誕生はるか以前の化石である。

大子町で人類の存在が確認できるのは、今から一万二千年前の先土器時代からであるが、集落が開かれたのは、塙遺跡（依上地区）や川西遺跡（袋田地区）から出土した縄文土器や矢じりなどから判断すると、今から数千年前のころである。しかし、大子地方が歴史に登場するのは九世紀に入つてからである。

『白河古事考』によると、『続日本後記』に遣唐使の資金を補い助けたのが八溝の黄金であることが書かれている。また、『倭名類聚鈔』には、白河郡郷名一七郷の中に依上郷がみられ、大子地方は古代から依上（寄神）と呼ばれ、「郷」ないし「保」として陸奥

## 『大子風土記』の発行にあたつて

大子地方の歴史は、衣食住の文化を基盤に政治、経済、科学、芸術等のあらゆる分野で原始、古代、中世、近代、そして現代にわたつて文化を耕し、時代を重ねてきたのである。しかし、第二次大戦後の経済の高度成長や情報社会の到来によつて、地域固有の生活文化は失われてきている。このような傾向は日本ばかりではなく世界的な傾向であるが、日本においては惜しげもなく捨て去られているのが現状である。人々の生活様式や価値観等が急速に変化していくとき、過去の確かな記録を識しておくことは、現代に生きる私達の責務でもある。

『大子風土記』を発行する第一の目的は、今失われつつある身近な地域の生活にかかわってきた生活文化を記録、保存することにある。第二の目的は、地域のもつ多様でしかも豊かな歴史を後世にきちんと伝えることにある。『大子風土記』の刊行が消えゆく身近な生活文化の墓標、挽歌ではなく、長い歴史の中で息づいてきた生活文化を育ててゆくとともに、消えゆく生활文化の再生の覚醒になることを願つてゐる。

（小澤）

## 漆搔き—男体山麓の古分屋敷を訪ねて

菊 池 信 也

平成十五年八月八日朝六時、茨城県大子町の男体山登山口にある古分屋敷から棒目木地区へ、俳句仲間五人で漆搔きを見に行つた。「漆搔き」は夏の季語である。漆搔きを見るのは皆初めてなので登山靴を履き張り切つていた。朝、霧の中、奥久慈漆振興協議会長桐原道明さん（七〇歳）の案内で漆林に着いた。漆の木は南向きの日当たりのよい急傾斜地にあり、十本ほどまとまっている。一本一本の木には、隙間なく大きな葉が茂り、木陰はひんやりとしていた。

良質な漆液を探るには、木の勢いのある八月がよく、しかも夜明けの五時から午前十時までが最もよい。また毎日同じ時刻に搔くことが原則である。漆の木には雌の木と雄の木がある。雌の木は花を咲かせて茶褐色の房状の実を成らせるため養分がそちらに行つてしまい漆液の出が悪くなる。だから雄の木が採液に適するのである。

漆の木は十年から十五年で育てられ、木の直径が十五センチ程になると、漆液を探取できるようになる。そして一年間で漆液を全て採取し、その後は切り倒されてしまう。このため「殺し搔き」と呼ばれている。これは透明度の高い漆を探る方法なのである。

漆を搔くときの服装は、帽子、作業衣、地下足袋、軍手である。作業衣は、漆が皮膚に当たらぬように襟のつまつた上着を着る。顔だけを除いて全て完全武装である。

漆搔きには専用の道具が必要である。木の幹の表面を荒削りするための長い蛇形をした腰鎌、表皮に傷つける漆鎌、樹液を

搔き出すへら、採取した樹液を集めて入れる漆壺などがあり、それらを全て腰のベルトにぶら下げて採液に当たる。

漆液を探るには、先ず腰鎌で幹の表面をきれいに削り、次に立てる」という。切つたあとには白い斜めの樹肌が見える。木には地中から水を吸い上げるための導管があり、搔き傷を付けるときは、この導管を避けなければならない。搔かれた樹皮からはじんわりと白い樹液がにじみ出てくる。次に同じ幹の反対側の表面を搔き、それから隣の木へ移り樹液を出させる。

このように付近の漆の木数本の幹に目立てしてから、最初の木にもどつて幹から出てきた樹液をV字溝のついたへらで搔き集める。そして先ほどの搔き傷の上方十五センチ位のところに、新しく目立てをして漆液を出させる。次々と同じように上方に五、六箇所搔き、そして集液を繰り返す。これが「漆搔き」である。採れる漆液の量は極めて少なく、一本の木の目立て一筋から一ccから二cc位である。二時間くらいの作業でも壺の底がやつとかくれる程度しか採液できない。採取した乳白色の漆液は、時間が経つにしたがつて黒くなるという。

大子の漆は品質が高いことから全国の漆器に使われ、主に東京、京都、和歌山方面に出荷されている。しかし、漆液の生産量は、昭和三十年頃をピークにして今日まで減少し続けている。その背景には、樹脂製品の普及や生活様式の変化による需要の減少、漆搔き職人の高齢化、後継者の不足などによるものである。最近は漆搔きの伝統的技法を次代に伝えたいと、後継者の育成や定年退職者の就労を考えた研修、実技講習会が催されている。奥久慈大子の漆器文化、漆器美術の伝統を保存し、より発展させていくことは、これからこの地区の人々にとって大切な課題であるかと思う。

## 【資料紹介】

母親文庫から婦人学級へ

・・・袋田小学校の取り組み・・・

袋田所谷の菊池しげさんは、昭和三十七年から昭和四十八年までの婦人学級の活動をまとめた「学級だより」一二冊を大切に保存している。その中の五冊は手作りのガリ版印刷である。この冊子から、当時の農村の母親の思いを紹介しよう。

「婦人層の読書集団の開拓と、家庭の中へ本を読む母親の姿を教育環境として築くのがねらい。県で最初の試み」として、袋田小学校を会場に、昭和三十六年十一月三日、茨城県立図書館主催の県母親文庫研究会が開催された。

当時の蛭田信國校長は、「野良着で、山仕事に明け暮れがちな母親の、本を手にすることへの物凄い抵抗には、同情さえ覚えたものだ。だが、二年が過ぎ、三年を迎えて、児童たちは、母のもとへ相変わらず楽しみに本を運んでくれた。そして、母親たちの読後の感想文が寄せられた」と述べている。

こうした取り組みは、翌三十七年十二月八日に、座談会「伸び行く母親文庫」として文化放送「くらしのニュース」番組で紹介されたのである。

この「母親文庫」が発展して、母親の教養を高めようと昭和三十七年一月二十五日に「婦人学級」を開校する。学級生百余名（二七三名のうち）が出席した。

助川てるさんは、「学級だより第1号」で、「子供に信頼される母となろう」と言う目標のもとに婦人の教養を高め、社会を明るくする目的に向かって袋田の発展と共に進むのが私達婦人学級の姿であると信じます」と述べている。

学級生の菊池アイ子さんは、「私達の学校の頃は戦争という大事があつたので、勉強どころではありません。・・・今までの文化の発達、このめまぐるしい世相。子供達に、ローマ字を、『これ何と読むの』と聞かれても、『母ちゃんの頃は、英語は、全然習わなかつたから知らないよ』と答える切なさ、何とか、教養を身につけて、少しづつでも進歩していくきたいと云う希望が湧いてきます。」と述べている。

昭和四十一年度の活動は次のとおりである。

四月十三日キツチンカー、ピラフごはんなど（開講式）

四月二十五日農薬問題

五月八日小学校児童の交通安全

六月二十九日伝染病について

七月十五日町政を聞く会（国谷町長、野尻地婦連会長）

八月八日夏の栄養料理講習

八月二十五日ふとんの綿入講習

九月十八・二十八日運動会参加

十月九日登校指導について

十月二十六日高血圧患者の調理法について

十月三十日食生活推進委員会講習会

十一月十六日鉢田小母の会との交歓会

十一月三十日交通法規について十二月七日乾めん調理講習会

十二月二十日交通安全教室

一月十一日貯蓄について

三月十六日若妻の集い

三月十九日手芸講習会

四月二日私達の食生活について（閉講式）

母親文庫からはじまり、婦人学級として発展していったが、

「婦人学級誌十周年を振り返って」、菊池しげさんは、「婦人学級があればこそ、つたない乍らも、ペンを取る事ができるという事は、大きな喜びではないでしょうか」と、学ぶ喜びを述べているのである。

（野内正美）

## ゾウ類足跡化石発見される

平成十七年一月十六日付け「茨城新聞」や他の新聞で、大子町大字西金地内から発見されたゾウ類足跡化石が大きく報道されました。

この足跡化石は、筑波大学大学院の教官が中心となつた「筑波大学足跡化石調査会」が研究調査を進めていたもので、今年一月には山形県山形市で行われた、日本古生物学會第一五四回例会において、研究成果が発表されましたが、その主な内容は「ゾウ類足跡化石が発見された場所は、西金子北沢地内二ヶ所の崖で、円形で直径三八センチから四八センチの足跡化石が合わせて十二個発見されました。発見された地層は、一六五〇万年前頃に積もつた新世代「三紀中新世の浅川層」ですが、現在までの研究で判明した代表的な結果は、次のとおりであります。

一、新生代第三紀中新世(一六五〇万年前頃)のゾウ類の足跡化石は大変珍しい物で、福井県について2番目の発見ですが、県北日本では最初の発見となります。

二、地層や足跡化石の状態から、沼地のような泥の場所をゾウが歩き、残した足跡の穴を、洪水で運ばれた砂が埋め、足跡の形が残されたと考えられます。

三、足跡の大きさが違うことは、子どもを連れた家族であったことも考えられます。しかし、更に詳しい調査の必要があります。

四、西金の足跡化石は福井県の物より、数も状態とも良好な超一流の足跡化石で、同じ時代のゾウの足跡化石は外国

でも無いようです。

現在の日本にいないゾウが大昔の大子町西金に棲んでいたという証拠と、それが大変良好な状態で残されていたことは、この足跡化石が大子町の自然遺産としての価値はもちろん、世界的にみても大変重要なものといえます」。(筑波大学足跡化石調査会資料抜粋)

これらの研究成果を「筑波大学足跡化石調査会」では、二月一日地元大子町に状況報告と地元への協力を申し出ました。

この報告を受けて大子町では、筑波大学、西金地区、地権者の協力を得て、地元北沢地区住民及び報道機関への公開現地説明会を開催しました。参加者からは「その時のゾウさんは逆立ちして歩いたのですか?」等、素朴な質問がでるなど熱心な説明会となりました。

今後は地権者の理解協力のうえで、発見地の崩落、落石の危険の表示や説明板の設置等が予定されています。文化財としての保存等は今後の検討課題としても、化石を通して人間が存在していない大昔に思いをはせることは雄大な浪漫であります。

— 鈴木 徹

編集発行

## 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室 気付  
久慈郡大子町大字池田二六六九番地  
〒319-3551☎02957(2)2627

中新世のゾウ

